研究の現場から

廣池千九郎研究室の研究動向

廣池千九郎関係資料の整理と保存

廣池千九郎研究室 研究員
矢野 篤

現在、道徳科学研究センターではモラロジーに関する理論的研究と実践的研究を行っていますが、それらの研究の基礎となるのが廣池千九郎の遺した諸資料です。文書類、図書、遺墨、遺品、写真、映像や音声のフィルムなどからなる資料群は、廣池千九郎関係資料とも呼ばれ、大半は記念館の収蔵庫に保存されています。その他にも、中津記念館にある生家、畑毛記念館にある富岳荘・論文執筆の部屋、柏キャンパスにある麗澤館・貴賓館、谷川・大穴記念館にある麗澤館・神壇・臨終の間などの建築物も廣池の事跡や思想を知るうえで重要な資料といえます。

収蔵庫内の文書資料が収められている棚

私の研究は、博物館学やアーカイブズ（記録史料）学の視点からこれらの資料を分析することです。廣池の没後、資料がどのように整理・保存されてきたのか。資料全体の構造はどのようになっているのか。それぞれの資料の関連性はどうなっているのかなど、さまざまな視点から調査したり、考察したりします。また、資料の数量やサイズ、形態、状態などを一点一点丁寧に確認していきます。資料に記された内容はもちろん重要ですが、資料そのものが持つ情報を知ることも大切なのです。

以前、廣池が京都時代に創刊した『史学普及雑誌』という歴史雑誌の草稿を調査していた際に、発見したことがあります。普通、複数枚の原稿を綴じる際はコヨリが使われるのですが、この草稿を綴じてある箇所は何か別のもので貼り付けてありました。最後の一枚がはがれていて、よく見るとご飯粒をつぶしたものが付いていました。おそらく、コヨリがなくなったため、台所にいた春子夫人からご飯粒をもらってきて、糊として使ったのでしょう。これを発見した際、私には京都時代の廣池夫妻の生活の一場面が生き生きと浮かび上がってきました。草稿が活字化され、雑誌になれば、このような情報はもちろん失われてしまいます。元の資料が残っていることで、知ることができるのです。

廣池は生前、モラロジーの更なる発展を後進の研究者に託し、それに必要な資料を永久保存するように指示しています。研究者たちが資料を十分に活用できるためには、物理的な整理とともに、情報がきちんと整理されていることが大切です。現在、最新の博物館学やアーカイブズ学などの知見に基づいて、新しい目録の作成や総合的な検索システムの構築を進めています。